

様式 7 - 1

平成 17 年度開始 交付金プロジェクト研究課題 事前評価結果

課題名：ツキノワグマの出没メカニズム解明

主査氏名（所属）：川路則友（野生動物研究領域）

担当部署：森林植生研究領域、森林管理研究領域、海外研究領域、関西支所、東北支所

参画機関：岐阜大学、茨城県立自然博物館、茨城大学

研究期間：平成 17～19 年度

1. 目的

本州以南で最も大型の森林性哺乳類であり、アンブレラ種として保全対象種とされることも多いツキノワグマが、近年、人間の活動域である各地の里地里山に出没する頻度が増加し、人間との接触機会も増えて、人身被害などの影響が顕著に現われてきた。これまでも出没の顕著に見られる年が何年かおきに見られたが、その原因については十分明らかにされておらず、対策も確立していない。そこで、出没個体の生理生態学的側面、生息地の環境特性、食物資源の存在様式に応じた生息地利用特性を検討することにより、ツキノワグマが人間活動域に頻繁に出没するに至った要因を解明することを目的とする。

2. 終了時に得たい成果

出没個体の生理生態的特性を明らかにし、それらを考慮に入れた出没回避策、出没個体捕獲による個体群保全への影響を提言する。また、食物資源の変化が行動域、食性におよぼす影響を明らかにし、クマの出没数増加を予測するために着目すべき食物の特徴とその判定方法を提言する。さらにクマの出没しやすい土地利用、地形、植生の特性を明らかにし、クマの出没を軽減させるための森林管理の指針作りに貢献する。

3. 評価委員の氏名（所属）

羽澄俊裕（野生動物保護管理事務所代表取締役）

4. 評価結果の概要

クマの生態情報に関する基礎的な研究に取り組み、出没現象を誘発する原因を抽出していくという目標設定は妥当である。出没地点情報と、対象地域のGISによる景観的解析は出没抑制の応用面として期待される。ツキノワグマ個体群の遺伝的評価は保全や管理の方向性を定める上で重要であるので、表面的な識別のみならず、移動の特徴といった生態学的観点を加味し、遺伝子によってどこまでわかるものか整理しておく必要がある。GPSテレメトリーという最新の機器を用いての行動追跡は、大いに期待できるが、集団で生活する動物ではないツキノワグマの行動様式を解明するためには、同一地域での数10頭レベルでの多数個体の追跡が不可欠であり、同じ個体についての連続追跡も考慮する必要がある。

5. 評価において指摘された事項への対応

有害捕獲、狩猟個体からのみならず、行動追跡個体からのサンプリングによる遺伝解析は積極的に行い、生態学的観点からの解析を試みる。予算面での制約はあるが、なるべく多くの個体の追跡を行い、堅果類の結実変動との対応をみる。